

書評

マイク・ペンス副大統領回顧録

島田 洋一（福井県立大学教授）

本書はトランプ政権で副大統領を務めたマイク・ペンスの回顧録である。原題は「神の御加護を」(Mike Pence, *So Help Me God*, 2022)。邦訳はまだない。

ペンスは敬虔なクリスチャンとして知られ、本書でも、難境に直面して祈りを捧げる場面が多く出てくる。

この辺り、落ち着いた揺るぎない保守派として信頼を集める半面、やや抹香臭く、政治家としての華がないという評価にもつながる。ペンスは大統領選出馬を視野に活動しているが、ブームを起こすのは難しいかも知れない。カリスマ的指導者の補佐役として最も生きるタイプではないか。

ペンスは1959年6月、アイルランド系両親のもとに、中西部インディアナ州で生を享けた。大学1年次の終わりに参加した大規模クリスチャン音楽祭(イクトゥス・フェスティバル)。1969年のカウンター・カルチャー的フォーク・ロック祭典「ウッドストック」に対抗して、ケンタッキー州で1970年から2015年まで毎年開かれた)で電撃的な啓示を受け、生涯イエス・キリストに付き従うと決意したという。「私は生まれ変わった (born again)」とペンスは記している。当初カトリック教徒だったペンスだが、結婚し子供が生まれるに至って、福音派教会に籍を移している。

弁護士資格を取得後、ロナルド・レーガンの「楽天的な指導力と、市井の人々と結ぶ力」に魅了され、民主党員(1976年大統領選ではカーターに投票した)から共和党員に転じた。「レーガンが、私が共和党に参加した理由だった」とペンスは言う。

29才で連邦下院議員選挙に挑戦したが、2回続けて落選した。1994年、「保守的理念を健全なエンターテインメントとユーモアを交えて伝える」話術で、当時センセーションを巻き起こしていたラッシュ・リンボーに強く刺激され、同じくラジオ・トークショーの「マイク・ペンス・ショー」を立ち上げ、一定の成功を収めた。

ボーン・アゲイン体験を経て、レーガンとリンボーをモデルと仰いで自己を形成するのは、現代アメリカ保守の典型的あり方と言えよう。

当初はリベラルな時代風潮に一定程度染まっていた真面目な若者が、次第に保守の王道を選び取っていく過程を、この回顧録は分かりやすく伝えてくれる。

2000年の選挙で、ペンスは遂に下院の議席を得た。2012年にはインディアナ州の知事選に出馬し、当選する。その後大統領選への挑戦も考えたが、機いまだ熟さずと自重する中、2016年、共和党大統領候補となったトランプに、副大統領候補の白羽の矢を立てられた。

あなたは何者かと聞かれた時、ペンスはこう答えるという。「私はクリスチャンで保守派で共和党員。この順に私はある」。

ペンス本人は軍歴を有しないが、親族には軍人が多い。

ペンスが初めて韓国を公式訪問した時、最も感動したのは、「歓迎ペンス副大統領」のポスターの中に、「ありがとうエド・ペンス中尉」の文字があった事だという。朝鮮戦争に赴き、戦った父親の名だった（仲間が多く戦死する中、幸い生還し、石油関連ビジネスで一家の生計を立てた）。

ペンスの息子は軍人の道に進み、娘も軍人と結婚している。

朝鮮半島絡みのエピソードを、もう一つ紹介しておこう。2018年2月のピョンチャン冬季五輪開会式に、米国代表団を率いて参加したペンスには、対北朝鮮外交という重要ミッションがあった。北は独裁者の妹、金与正を派遣してきた。

極端な従北姿勢を取る文在寅韓国大統領は、何とか自分が主導する形でペンスと金与正を引き合わせようと、策をめぐらした。

開会式前夜の晩餐会。意識的に遅れて到着したペンス夫妻を、近寄ってきた文在寅が、金与正の座るメインテーブルに導こうとした。ペンスは、各国代表たちと握手を交わしつつ、北朝鮮一行だけは無視し、そのまま食事の席には着かず、会場を後にした。ペンス夫妻の名札が載った最も目立つ2席のみ、終始空席のままとなった。

カメラを前に、凄惨な人権蹂躪の首謀者と握手し、談笑することは許されないとの判断からである。開会式でもペンスは、すぐ右後方に座る金与正を終始無視した (I ignored her.)。

ただし、北の側にトランプに伝えたいメッセージがあるなら、カメラ抜きで金与正に会う用意はあった。水面下の交渉の結果、開会式の翌日、韓国大統領府（青瓦台）で米朝の面談が行われる運びとなった。

しかし予定の2時間前に、北側が「ピョンヤンからの指示で」会談をキャンセルしてきたという。米マスコミは、ペンスの挑発的な振る舞いが外交チャンスをつぶしたと非難したが、トランプは「何も問題ない」と評価した。

数週間後、ホワイトハウスを訪れた韓国政府高官から、トランプと直接会談したいとの金正恩のメッセージが伝えられた。

トランプの「タフで、ショッキングですらある」強烈な脅し、様々な制裁、五輪での冷たい対応などに「北朝鮮が動揺した証拠」であり、「非合理的な対応が最も合理的なことがある」とペンスは分析する。

最後は、2020年大統領選挙でのバイデン勝利を認めるかどうかで袂を分かったが、トランプとペンスは名コンビだった。そう思わせる記述が、本書には多数ある。必読の資料と言えよう。